

映画字幕翻訳者・通訳

戸田奈津子

Natsuko Toda

『地獄の黙示録』『E.T.』『レイマン』『タイタニック』……数々の名作の字幕翻訳者として知られる戸田奈津子さん。三〇年以上の間、第一線で活躍を続けて、これまでに手がけた映画字幕は約一五〇〇本!「職人芸」のような字幕翻訳の仕事で、戸田さんが大事にしてきたことは何か。映像技術の進歩に伴う字幕の環境変化、映画の未来像、ハリウッドスターの素顔の紹介まで、幅広く語っていただいた。



取材・文 小堂敏郎

写真 野瀬勝一

「字幕翻訳」

好きだからこそ切り拓いた道

セリフのエッセンスを一秒・二字で表現する

——私は洋画が大好きなのですが、エンドロールで戸田さんのお名前を何度拝見したでしょうか。長年にわたって手がけられてきた字幕翻訳とは、単なる技術ではなく、芸術の域に達しているようにも思われるのですが。

戸田 字幕は「芸術」などではなく、「職人芸」です。字幕によって映画の物語をわかってもらうことが大事で、字数が少ないからセリフ



「KEEP ON DREAMING 戸田奈津子」(双葉社)より

のエッセンスを的確に短く、詰めていく。セリフをただ切り取るのではなく、そのシーンにふさわしい翻訳の表現を考え、画面に出せる文字数に合わせ、字幕をつくっていく作業です。

——字幕は、一瞬のうちに画面に出たり消えたりしますが、あれは何文字あるのでしょうか？

戸田 お客様は画面を見ている合間にちらっと字幕を読むわけですから、非常に限られた文字数しか頭に入りません。その制限は一秒間に三〜四文字ということになっていきます。ですから、パッと見た字幕を瞬時的に理解してもらうためには、だれにでもわかりやすく表現せねばなりません。耳慣れない言葉とか、若い人たちにだけわかる流行語などを使うと、戸

惑うお客さんもいるでしょう。読み切れないまま字幕が消えたら、映画の物語が理解できないまま先に進んでしまいます。お客さんが一瞬でも戸惑ったり、文字を読み切れなかったりして、映画の鑑賞を妨げるような字幕は、良い字幕とは言えません。

——字幕はセリフのエッセンスを凝縮し、詰めていく職人芸だと。その芸を身につけるために、どういう訓練を受けたのですか？

戸田 この職業には専門の訓練施設のような場がありません。日本は、外国映画を字幕で鑑賞する習慣が定着している珍しい国です。他の国は吹き替えが主流。そんな中で、字幕の草創期に翻訳を担当していたのは、映画会社に勤める外国語が堪能な社員でした。この方たちが戦後、会社から独立して字幕翻訳者になっていった。字幕翻訳は、その始まりのところから、

人に教えたり教わったりすることがない一匹狼の職人芸だったんです。

私の場合は、腰掛けの会社勤めをした後、いろいろなアルバイトをしながら、字幕翻訳の世界を目指していました。そして『地獄の黙示録』の字幕を担当してから依頼がどんどん舞い込むようになり、現場で試行錯誤を繰り返して、自分なりの字幕翻訳を身につけていったという感じでした。

——職人芸となると、字幕翻訳者ごとに文体に特徴が出そうですね。

戸田 字幕の分量は、セリフごとに二字〜二五字の字幕が出るとして、二時間の映画でスクリーンに出る字幕枚数が平均一二〇〇枚くらいになります。字幕だけをまとめて読むことはないでしょう。読めば、人によって文体が違ってくると思いますけど、字幕はあくまでも映像あつてのものですから



とだ・なつこ ●東京都出身。津田塾大学英文学科卒業後、保険会社に約1年半勤務した後、英語関連のアルバイトをしながら字幕翻訳者を目指す。1970年公開の『野性の少年』で映画字幕デビュー。79年、フランシス・コッポラ監督の推薦を受け、超大作『地獄の黙示録』を担当し、字幕翻訳者の第一人者としての地位を確立。以後、『E.T.』『アマデウス』『レインマン』『タイタニック』『ミッション：インポッシブル』など約1500本の作品を手がける。現在も字幕翻訳の第一線で活躍するかたわら、来日する海外のトップ・スターの通訳やアテンドも担当する。おもな著書に『字幕の花園』（集英社文庫）、『スクリーンの向こう側』（共同通信社）、『KEEP ON DREAMING』『ときめくフレーズ、きらめくシネマ』（いずれも双葉社）などがある。

ら、映像と一緒にでなければ存在価値がなく、それだけ読んで、全くおもしろくありません。

——ところが、映像と一緒にになると、相乗効果によって字幕の意味が浮かび上がってくる。

戸田 ええ。ロマンチックなシーンに想いをこめた俳優の声や表情が重なる、「君が好き」というだけの単純なセリフがいかにロマンチックな意味を放つ。お客さんのそういう錯覚を利用するのも、字幕翻訳のおもしろいところです。

——映画の登場人物の「思い」も字幕から伝わってきます。

戸田 映画で描かれるドラマって、エモーショナルなものでしょう。お客さんがそれを楽しめるように、字幕をつくらなくてはいいけません。悲しい場面では泣けて、おかしい場面では笑えるように、字幕から伝わらないとだめです。

でも、「笑い」を字幕にしているのは難しいですね。感動したり、泣いたりという感情は世界共通で、言葉を超えてだれでも理解できると思います。「笑い」だけは、そうはいきません。例えば駄洒落は、その言語を知っているという土台があるから笑えるんです。英語の

土台をシェアしていない日本人に、英語のジョークは通じないし、まして字幕の文字だけで笑わせるなんて至難の業です。

——最近の映画館は国際化して、日本人と外国人と一緒に観る機会も増えましたが、鑑賞中に笑いのタイミングがずれたりすることがあります。

戸田 外国人が笑っているのに、日本人はしらっとしていることも

CG中心の映画で字幕翻訳の作業が変わった

——いろいろな作品の依頼があると思いますが、どの映画の字幕を担当するか、戸田さんが決めるのでしょうか。

戸田 私が決めることはまずないです。あくまで映画会社からいただいた作品を担当します。立場上、字幕翻訳者は受注側ですから。忙しくて時間がないときはお断りしますが、試写を観てから「つまらない作品だから嫌です」などとは言えません。試写を観たら、最後です。字幕を引き受けることにな

あるでしょう。そうすると「字幕が下手だ」って言われて、ガックリします。そもそも日本人は映画を鑑賞するときは目で、あまり泣いたり笑ったりしません。だから外国人の監督や俳優は、お客さんが期待どおりに反応しないと、びっくりするわけです。それを字幕の責任にされるときは、字幕翻訳者って損な役回りだなあと感じますね。

りますね。

——字幕翻訳の作業は試写を観ることからはじまるのですか。

戸田 私は試写の後、シナリオのセリフを見ながら、同時に耳で聴いてニュアンスを確かめて字幕をつくっていきます。ただ、ここ数年、字幕をつくるテクニカルな面で環境が大きく変わってきました。

——どのような変化でしょうか。

戸田 昨年公開されたCG（コンピュータグラフィックス）映像の多い『007 スペクター』を



「KEEP ON DREAMING 戸田奈津子」(双葉社)より

例にとりましょう。映像技術者たちが、コンピュータの中で映像をつくるわけですが、手をかけていい映像にするために、なかなか作業が完成しません。それが封切りギリギリまで続き、我々翻訳者の手に映像が来ないのです！映画がフィルムだった時代は、一度プリントした映像はいじれなかったのに、現在のデジタル映像は何度でも修正できます。

そのために翻訳者は刻々と追ってくる封切り日を横目に、いつ完成映像が届くのかと地団駄を踏んで待つことが日常化しました。今回の『007』も最終映像がなかなか届かず、封切り前の一週間で何とか字幕原稿を仕上げるといふ状況でした。

——そうになると、試写を観てから字幕にとりかかる、という手順も変わったのでしょうか。
戸田 フィルム時代は試写室でフィルムをかけて新作を観るといふ手順でし

たが、今はデジタルです。つまり新作の映像は空中を飛んで、わが家のパソコンに送られてくるのです。もちろん映像が途中で盗まれ、海賊版などが出たら大変ですから、映像のデータには厳重なセキュリティがかけられ、複雑なパスワードで守られています。ITにヨワイアナログ人間の私がパスワードと格闘する羽目になるのです。こういう時は心底、ITの進歩を呪いたくなります。

——字数の制約とか、字幕翻訳の内容にも変化がありますか。
戸田 どんなにITが進歩しようと、翻訳自体は何も変わっていません。英語を日本語にする翻訳自体に変わりはないし、字幕の制約も一秒間に三〜四文字のまま。人

——昨年秋に公開された『ラスト・ナイツ』では、字幕について戸田さんと監督で話し合ったとお聞きしました。

戸田 字幕翻訳者が外国映画の監

がしゃべるスピードは昔も今も変わらないし、人が字幕を読むスピードも昔より速くなっただけではありませんから。
むしろ若い人を中心に活字離れの現象が起きている影響なのか、「字幕

に追いつけない」という人が増えていきます。外国映画を字幕で観るようになった理由の一つに、日本人の識字率の高さがあると私は考えているのですが、それがあやしくなってきたり、吹き替え版を好むお客さんが増えている現実が、それを物語っていると思います。

映画の世界に導かれ、好きな仕事で生きてきた

督と接触するということは、通常、皆無です。しかしこのハリウッド

映画は日本人監督の紀里谷和明氏の作品でしたから、異例にも監督と顔を突き合わせ、一語一句、あ

あしように、こうしようと直しながら字幕をつくることができました。理想的な字幕づくりですが、通常は地理的にも、時間的制約を考えなくても無理なのです。

——日本語を母国語とする監督が、外国映画を撮ること自体少ないような気がします。

戸田 海外で活躍する日本人俳優も少ないでしょう。一つの大きなネックはやはり言葉だと思います。その中でケン・ワタナベ(渡辺謙氏)の『ラストサムライ』はすばらしい出来でしたが、日本人俳優がフルに力量を発揮できるあのような映画は数十年に一本? とにかく稀です。一方、技術部門を見ると、最近、ハリウッドで活躍している





「KEEP ON DREAMING 戸田奈津子」(双葉社)より

日本人がととも増えています。監督や俳優にはとてもハードルの高いハリウッドですが、映像技術だったら、実力さえあれば日本人にもチャンスが開けています。

——A・シュワルツェネッガーやS・スタローンは、なまりの強い英語でも演技力が高く評価されていますね。

戸田 主演の『ターミネーター』や『ロッキー』の役柄に合わせているのでしょう。普段はあんなになまっていないですね。二人ともマッチョなイメージが強いと思いますが、じつはとっても頭が切れる。今までいろいろなハリウッド俳優に会いましたけれど、頭のよさではトップクラスです。アメリカ生活三〇年以上のシュワルツェネッガーは、完璧な英語を話せる

よりはずです。でも彼は自分のトレードマークとして、あの長いドイツの名字となまりを計算して残しているのだと私はいらんできます。

——戸田さんは字

幕翻訳を手がけながら通訳もされています。海外のトップ・スターと交遊されたり、各国に出かけられたり、常に世界と接していらっしゃいます。

戸田 いえいえ、私は本当に井の中の蛙です。日本以外で暮らした経験は一日とないし、日本で字幕の勉強をして、日本で仕事をしてきました。海外に旅行しても、現地の暮らしの中まで入っていくことはありませんから。

でも、振り返ると、私は子供のころから「未知のものを観たい」という気持ちは強かった。本や映画の中でイメージの世界を膨らませて、フィクションの世界にトリップしたり、主人公と同じ体験をする想像をしたり……。今も字幕翻訳の作業をしているときは、頭の中で映画の世界にとんでいきます。セリフを字幕に翻訳しながら、そのキャラクターと一緒に冒険をしたり、素敵な恋をしたりする。現実の自分は何もアドベンチャーしていないけど、楽しい疑似体験です。

——字幕翻訳者という、けっしてポピュラーではない職業を志した

こと自体、アドベンチャーだったように私は思います。

戸田 そういう意識は自分の中には全くありませんでした。ひたすら映画が好きで、ドラマの世界にひたりたい、字幕の仕事をしたという気持ちだけでした。そして自分が字幕に助けられて映画を楽しんだように、映画の楽しさを皆に味わってもらいたいと思ったんです。

——それで生計も立ててこられたのは素晴らしいことだと思います。

戸田 本当にラッキーだと思っています。好きなもののなかに、私の生きる道があったのですから。イヤなことは切り捨てる人生でした。多くを捨てましたが、そのおかげでストレスとも関わりをもたないでこられたと思っています。

——アナログからデジタルへ一層進歩していくと、これから映画はどうなるでしょうか。

戸田 今は変化の途中段階ですが、映画館で映画を観る時代は、いずれ終わりを告げるでしょうね。デジタルで配信が可能になったので、映像が各家庭のモニターに送られてきて、オン・デマンド

で映画を観るということになるのでは？

今はCG映像のスーパーヒーロー物が大人気ですが、二〇世紀の映画ファンが『ローマの休日』とか『アラビアのロレンス』から得たような喜びや感動を残す作品は少なくなっているように思えます。特撮満載のスーパーヒーロー映画が何十年後まで感動を残すでしょうか？ これからも内容の濃い映画がつくられてゆくことを。そして字幕が引き続き、映画を楽しむお手伝いをしてくれることを念じています。

——本日は、貴重なお話をどうもありがとうございました。

(聞き手／情報サービス局長・高橋経二)

